

河川環境保全と淡水魚保護運動

会長 ちんかぶ会
山本 正明

はじめに

環境問題は今、国内にとどまらず世界的な観点から取り上げられ、世論的にも大いに盛り上りをみせている。

この課題は世界的にみると先進国と発展途上国との間にかなりの相異を生み出しているようだ。いわゆる先進諸国のツケを負わされているという実態や途上国側の経済優先主義からくるゆとりの不足などが露呈し一筋縄では解決できないむつかしさを呈している。

私達ちんかぶ会では10数年前から河川美化運動を取組む中で常々先に述べた環境問題について論じてきた。しかしながら世界的な問題や経済中心の体制など余りにも大きな課題である。それぞれの地域の住民が誰でも気軽に参加でき、実践活動を通じて少しばかりでも先の大きな流れが変わっていく事が出来るなら幸いであると考え、息の永い運動を推進して今日に至っている。

企業倫理が問われている今日、タカラファンド基金を設立され様々な環境美化に取り組んでいる個人や団体に対し援助されている姿勢は大変評価すべきものであると思い、今後も全国の無名の個人や団体の後押しを望んでいます。

実践活動報告

(イ)河川清掃活動

月2回、第1・3日曜日朝7時より約1時間。4月より11月迄。(冬期間は降雪の為中止)

(ロ)広報活動

会報「たかはらがわ」の発刊。

年2～3回の発行。会発足時の創刊から第23号まで既刊で、現在新聞折込みにて全戸配布。

(イ)例会の開催

毎月1回の開催。各会員の情報や意見交換。月1,000円会費は例会時に徴収している。新年宴会や忘年会と8月例会は鮎例会として大いに飲み語る会にしている。

(ニ)分収造林への参加

国有林を借り受け「ふるさとふれあいの森」と名付け造林作業から始め、現在8年生の杉やヒノキの手入れを行なっている。家族連れで山の一日を体験学習。

(ホ)淡水魚飼育観察

昨年念願の飼育池や小屋の建設を実現し、イワナ・ヤマメ・マス・ウグイなどの淡水魚を飼育している。会として地元流域に生息している天然種が少しでも増殖すればと願っている。秋から冬期間には池の上流部の浅瀬には産卵行動もみられる。

(後述にて詳細報告)

(ヘ)水生生物による河川水質調査

毎年高原川水質調査を行なっている水生生物の生息状態を調べ河川の汚染状況をチェック

(ト)ふるさとイワナ教室の開催

町内の小中学校において高原川のイワナの生態をスライドで見てもらい講演会形式で教室を開催している。

天然イワナの飼育と淡水魚保護運動

前号にて北アルプス淡水魚保護視察センターの建設に着手した事を報告させていただきました。同センター前の飼育池には北アルプスを源流にもち富山湾に流れている高原川（下流富山県境で宮川と合流し神通川となる）で採取した淡水魚を飼育している。本州中部に生息するアメマス陸封個体群は、川毎に形態や色彩の変異の大きいことが知られている。これはアメマス陸封型が氷河期が終わり海と川を行来をしなくなって後に陸封された水系だけで再生産を繰り返してきたためだと考えている。高原川に生息するイワナもまた同様であり神通川水系の環境と共に長い時間世代交代を繰り返してきた中で、彼等は他のどの川に住む魚よりも高原川を始めとした神通川水系の環境に最も良く適応しているはずである。一方、日本各地では内水面漁業組合によりイワナの放流事業が行なわれているが、残念な事に、この放流用種苗は養殖業者が生産しているため、他水系産のイワナである可能性が高く、このまま放流が続けられていくと純粋な高原川産のイワナはいなくなってしまう恐れがある。また遺伝子資源の観点からみても高原川の岩魚を保存する事は重要だと考えられる。これらの理由からイワナの飼育が始まった。平成2年春に

開始ひょうたん形の素掘の池で取水している上流部は水深30～50cm底質は砂利、礫、小石でイワナの産卵場所の目的で作られている。下流側は水深30～100cmで普段の生活場所となっている。イワナの採取は放流が行なわれていない双六谷のダム上流部から釣りにより行なった。飼育に際して、イワナの餌は人工飼料を用いているが、餌づけが難しく捕獲して池に放した物のうち約1割しか餌づかない。そのため、池で生長しているイワナは人工飼料に餌づき安いもの選抜してしまっている恐れはある。

現在40cm前後に生長したイワナは10数匹いるが、平成3年の秋に産卵行動を、翌年春には数百匹の稚魚の浮出を確認した。(イワナの他にはウグイ、ニジマス、ヤマメ、カジカ、ニゴイ、アブラハヤ等がいる)

現在(平成4年秋)も産卵行動が多数確認され来春も稚魚の浮出が期待される。

おわりに

活動報告に述べた各種の事業を実施しながら「ちんかぶ会」の運動は今日まで続いてきました。身近なライフスタイルを見直すことからさらに自然環境保護まで幅広く取り組んできました。これはひとえに会員一人一人の環境問題に対する認識や積極的な実践活動に参加する意欲の賜物であると思います。河清掃という簡単かつ単純な行動一つが今日複雑かつ不透明な時代には重要であるように思われます。郷土愛がさらに次代を担う子供を育て豊かな自然と共生できる将来に望みを託し、今後もこの運動に取り組んでいくつもりでいます。全国各地で多くさんのボランティア活動の仲間が誕生して呉れることを期待しています。



▲池の産卵体。昨年は、ここでヤマメ、イワナが産卵、数百匹の稚魚がかえり、河川へ戻っていった。今年も多数産卵を終えている。



▲水中の様子
池の中にはイワナ、ニジマス、ヤマメ、ウグイ、ニゴイ、カジカ等多数生息している。



▲北アルプス淡水魚、観察保護センター外観



▲北アルプス淡水魚観察保護センター内部
研修会や、ちんかふの例会、イワナ教室を開催